座談会

初年次教育の今

音　最近、初年次教育がさまざまな観点から注目されるようになり、各大学も積極的な取り組みを展開しています。本日は、初年次教育の具体的な様子や、それらへのお考えなどをお話しいただきたいと思います。

大きく変わってはいないものの 真面目化、二極分化する現代の学生

音　先日、本連盟から『第14回学生生活実態調査』が公表され、本誌前号では、その内容を基にした座談会を開催しました。座談会の司会をお務めになった難波先生は、若者文化論などを専門とされる社会学者として、現代の若者に関する発言や発表をなさっています。最近の学生気質などについて、まず難波先生からご紹介いただけますでしょうか。

難波　前回の座談会を通して、今の学生は以前の学生と比べて大きく変わったわけではないものの、真面目になっているという印象を座談会に出席された方々が共通してお持ちであることが分かりました。学生は授業やゼミにきちんと出席するし、課題も提出する。ただ、その内容はごく平均的なものが大多数で、ずば抜けたものとか面白い学生が見当たらないというお話でした。そしてその背景として、今の学生は就職氷河期以降に生まれ、日本の社会や経済に元気がない状況の中でずっと育ってきたという時代背景が挙げられました。

二極分化
——学力、経済面、そしてメンタル

難波　さらに、学生が二極分化しているとの指摘がありました。調査では平均値が出ますので、それだけを見ると以前とあまり変わっていないのではないかと思ってしまいがちですが、学力や経済的な面、およびメンタルな部分に深刻な問題を抱えている学生と、そうではない学生の差がどんどん開いているということを、座談会に出席さ

れた先生方が異口同音におっしゃいました。この傾向は大学1年生に限ったことではなく、それに対して大学関係者は、大変な危機感を抱いているものの、具体的にどう対処したらいいのか分からなくて悩んでいる実情が明らかとなりました。

Ｗｉｎｄｏｗｓやインターネットに子どもの頃から慣れ親しみ、インターネットやＳＮＳがコミュニケーションのベースになっている今の学生は、ＬＩＮＥが大学入学後の新しい人間関係構築のベースや人との関わり方のインフラになっていることが顕著に見て取れます。

学力面や経済面の二極分化が進む中、その両極端も含めて幅広く学生を受け入れることは私立大学の特徴でもあり、その対応が各大学の課題になっているというのが前回の座談会の議論の流れでした。

高校と大学とのギャップをいかに理解させるか――学びのＨｏｗ、Ｗｈａｔ、Ｗｈｙ

音　横山先生は初年次教育学会の理事をなさっていて、初年次教育についてアカデミックなアプローチからの分析もされていらっしゃいますが、真面目化する一方、学力、経済面で二極分化する学生のお話を受けて、初年次教育学会では、初年次教育の意義についてどのような議論をされているのかお聞かせいただけますでしょうか。

横山　初年次教育に関して考えなければいけないことは、学生に高校と大学との違いをいかにして理解させるかということです。初年次教育学会における議論では、多くの大学で導入されているアクティブラーニングについて、大学に入ったら自律的に学びなさい、自分で課題を見つけて学習しなさいという当たり前のことを、改めて学生に言わなければいけないのか、高大連携が声高に唱えられているのに、大学に入ったら学びの方法が違うのだと説明する必要があるのかという話がよく出てきます。

また、難波先生がおっしゃったＬＩＮＥの問題に関しては、二極分化する中で、スマートフォンを持っていない学生やＬＩＮＥなどのＳＮＳをあえて使わない学生と、ＬＩＮＥを手放せない学生の間に、コミュニケーションのギャップがどんどん生まれる、その怖さを感じます。

『第14回学生生活実態調査』にあったような薬物の問題など、法に触れるようなことには絶対に関わらないといったことも、初年次教育の中で教えなければならない。アルコールの問題もそうですが、以前であれば友人関係や先輩と後輩の関係の中で学んでいたことを初年次教育でカバーしているという状況があると思います。

音　安藏先生は、大学で教える側と付属の中学・高校の校長という両方のお立場から、大学の初年次教育の重要性を肌でお感じになっていらっしゃるのではないでしょうか。

安藏　大学での初年次教育で重要な第１のポイントは、学生に大学生としての生活をイメージさせることです。カリキュラムや履修登録など、入学したての学生には何のことか分かりませんから、必修科目の時間以外のところにどうやって選択科目を入れていくかという指導を行っています。また、図書館や大学のＩＣＴ（情報通信技術）の利用方法などについての指導も重要です。明治大学ではすべての授業がネット上にあり、ネットを通してレポートを提出しますし、いろいろなソフトを必ず使うので、情

報科目と連携しながら教えています。

２つ目は、大学で何を学ぶかということを考えさせることです。社会科学系は選択の幅が広く、特に私が教えている政治経済学部は、科目選択の幅がとても広い。自分がどういう問題に関心を持って４年間学んでいくのかを個々の学生にはっきり認識させるために、１年生にいろいろな教員が交代で自分の専門について話す講座があります。学問とはどういうもので、研究をするためには数学や社会科や古典などで学んだ知識を組み合わせて考えていくのだということを教えています。

３つ目は、何のために学ぶかということです。卒業後のキャリアデザインを１年生のうちから教え始めれば、４年間をしっかりと過ごせるのではないかと思います。

大学を４年間で卒業できない学生を分析したところ、１年生の前期・後期の学期で英語や体育でつまずく学生が多いことが明らかとなりました。その理由は、そもそも大学に来ないことにあるのです。そこで、成績をチェックする時はそこを重点的に見るようにしています。また、スポーツ推薦で入った学生の場合、学力に不安があるがゆえに大学に来なくなるということがありますので、１年生のクラスで互いに自己紹介をして、友達を作って、休まないようにサポートしあうようにさせるということも、大切なことだと思います。

大学と学生のミスマッチは、起こり得ます。しかし、大学でどう生活するのか、何を学ぶのか、何のために学ぶのかをきちんと教えるプログラムがあれば、意外にうまくいくのではないでしょうか。

音　聖学院大学は、充実した初年次教育で全国的にも有名でいらっしゃいます。

学びのモチベーション向上方策の検討が大切

清水　本学のような小規模大学の学生にとっての大学の意味ということを考えますと、その人生にかかる側面と大学生活の側面が分離したまま入学してくることがあるように思われることから、両者を初年次教育で融合させ、大学で学ぶ意味を再認識させるようにしています。例えば、大学生活の側面においては、人間関係につまずいた経験を持つ学生は、男子に多く、共同体にうまく溶け込めない、他人と協調的なことができないといった学生を目覚めさせるには、成績よりも何よりも、まず人間関係的なつまずきをどこまで修復できるかが第一義的に重要です。そこに着目した対応をしていることが、本学が〝面倒見がいい〟という評価につながってきたと思います。

先ほど難波先生がおっしゃった経済的な二極化が生じているとの現状は、本学でも同様で、どういう形で現れるかといいますと、大学のユニバーサル化によって保護者の学歴が多様な学生が増えました。そしてそれ故に、大学を卒業することが人生において大きな意味があるということを十分に伝えることができないがために、学生が３・４年生になって離学することが多いようです。この点については、初年次教育を通じて学生のモチベーションを引き出すための方策の検討が不足していたことを反省し、そのあたりに重点を置いた検討を進めております。また、パソコンを持っていない学生が非常に多く、いかにして全員にパソコンを持たせるかも初年次教育が抱える

難波 功士氏

問題の一つです。

音　初年次教育を積極的に行っていくことに関して、学内ではどのような議論があったのでしょうか。

清水　学科のほうでは文部科学省の大学教育改革プロジェクト支援（教育GP）に採択されていたので、力を入れていました。ところが、全学的に離学者が増え、学科ごとの対応では限界があるということで対応を考え始めたのが3年前です。

音　学生は真面目になったものの、やはりそれぞれにつまずきがあるというお話が皆様から出ましたが、まず勉学意欲を初年次教育を通じていかにして喚起していけばいいかという問題があると思います。学生の勉学意欲とか将来に対する意識について、難波先生はどのようにお考えでしょうか。

横山 千晶氏

難波　私の所属学部が社会学部であることもあって、学生たちは何を学ぶのか、漠然とした状態で入学してくることが多いようです。しかし、言われたことは一応やるというメンタリティーは以前より強く、ICT（情報通信技術）のツールを使いこなしてレポートをまとめたり、プレゼンテーションするといったことについては、ある程度のレベルになってきているという印象があります。

　私の学部では、以前は専任教員が1年生対象の基礎演習を担当していましたが、最近は若手の非常勤講師、PD（Post-Doctoral Fellow）を起用して、図書館の利用方法やレポートの書き方、ノートの取り方といった基本的なスタディスキルを学生に教え込んでもらっています。

学びの〝自分事化〟

難波　社会学部は社会学科1つに650名の学生が在籍しています。今春の入学生からは1年生の後半に、どのようなコースやゼミがあるかを学生に伝え、考えさせ、2年生の前期には、専任教員がインターミディエイトゼミという導入期間のようなものを担当して、学生は2年生の秋から専門ゼミに入るなど、なるべく前倒しで行うようにしてきています。

　学びに対するモチベーションに関しては、特に社会学部のように学問範囲が広い学部では、自分は将来どうなりたいのかということと関連付けて考えさせないと難しく、1年生のうちから考えさせようという議論が起こり、カリキュラムを改革中です。他の学部でもそれぞれ工夫を凝らして、「何のために学ぶのか」を1年生のなるべく早い時期に考えさせようというのが全学的な流

れです。

社会で活躍する卒業生を通じたロールモデルの提示

音　初年次教育は、650名の学生を何人くらいのクラスに分けるのですか。

難波　基礎演習では、20人くらいのクラスをPDが担当しています。PDは、1年生から見るとお兄さんやお姉さんという感じなので、専任教員が担当していた頃よりもうまくコミュニケーションがとれている部分もあるようです。また、英語のレベル分けのクラスと第二外国語のクラスもあるので、初年次教育では、その3つのグループのどこかに自分の居場所を見つけて新しい人間関係を作ってほしいと思っています。

安藏　伸治氏

音　安藏先生の政治経済学部も、1学年の人数は多いでしょうね。

安藏　1学年で約1000名の学生を、20～30名のクラスに分けています。

音　そこでの勉学に対するモチベーションアップというのは、どのようになさっているのでしょうか。

安藏　1年生に対して、専門課程の教員が毎週交代でそれぞれの専門分野を説明し、それを専攻するためには1・2年次に何を学ばなければならないかという話をする必修科目があります。また、就業力育成支援授業では、例えば公務員になりたい、ジャーナリストになりたいという学生に対して、実際にその職業に就いている明治大学の卒業生が来て話をするということもやっています。さらに政治経済学部では、社会で活躍している女性の卒業生に来てもらって、女子学生のためのキャリアカンファレンスを行っています。学生にロールモデルを見せることで、結構モチベーションの向上につながっていると思います。

清水　正之氏

音　清水先生の大学では、勉学意欲を引き出すために具体的にどのような取り組みをなさっているのでしょうか。

清水　大学は政治経済学部、人文学部、人間福祉学部の3学部で構成されていますが、人間福祉学部のように資格取得が大きな目標になっている学部と違い、人文学部や政

音　好宏氏

治経済学部では、まず学ぶことの意味を理解させる必要があります。こうした学部間での違いがある中で、各学部学科がこれまで別々に初年次教育を行って蓄積してきた内容を、学力、人間力、そして人生構想力という枠組みをつくり、全学的な取り組みとして統合しようとしています。

具体的には、1年生600名を18クラスに分け、教員2名と在学生のアシスタントを付けて、キャンパスライフデザインという名称の全学行事を3日間行いました。学生にとってはこのキャンパスで学んだことが一つの財産になり、モチベーションにつながることを目指しています。

音　横山先生、今の先生方のお話をうかがった感想をお聞かせください。

2年次以降を視野に入れた初年次教育の必要性

横山　大学では初年次にいろいろなプログラムを実施していますが、問題は、清水先生がおっしゃったように、3・4年次に離学する学生の存在です。初年次教育学会では、これからの初年次教育は初年次だけで終わるのではなく、2年次以降のことも視野に入れながら、高校から大学2年次以降の専門教育へつなげていくための要として捉えなければならないのではないかということを議論しています。

モチベーションの問題は非常に難しく、まだ何も分からない学生に、これから自分のキャリアをどうデザインしていくかを教えることの重要性とともに、一方で、すでにしっかりしたモチベーションを持っている学生のやる気をいかにして引き上げていくかということについても考えなければいけないという話もよく出ます。

慶應義塾大学では、学部の縦割りを乗り越えた全学的な取り組みを進めるために、教養研究センターを2002年に創設しました。そこでは、1年生のうちに身に付けてほしいことに特化して、各学部の先生が共同でスタディスキルズの授業を行っており、また「身体知」を考慮した体験型の授業に力を入れています。後者では、通信教育の社会人学生と夏のスクーリングで共に学ぶことにより、学生のモチベーションが非常に高くなるということもあり、先生方がいろいろな方法を考えています。ただ、問題は、教員も非常に多忙で協力を得ることが難しく、一部の教員だけががんばってしまうという弊害がよく指摘されています。

音　先ほど難波先生からは、PDを活用していらっしゃるというお話がありました。初年次教育を行うことで教員の負担が増え、教員から反発が出ることが予想されますが、その調整はどのようにすればいいのでしょうか。

難波　基礎演習全体をコントロールする教員は2名いて、PDたちの指導役に就いています。その教員2人には非常に負担がかかっています。PDにお願いすることには一長一短がありますが、専任教員は2年生前期を対象としたゼミに注力し、2年生後期以降の専門ゼミへの導入部分を担当するシステムに変更中です。

音　初年次教育の内容は、学部によって違うのでしょうか。

難波　共通教育センターはありますが、初年次教育に特化しているわけではありません。

安藏　明治大学では、学部間の共通科目がいくつかあります。教室でNHKスペシャ

ルのDVDを見て、その問題をどう考えるか、番組を制作したプロデューサーを招いてお話を聞いたりしています。

各学部ではいろいろな形のゼミや必修科目、総合講座などをカリキュラムに配置しています。私が3・4年次の総合講座を担当した時は国会議員を5人お招きして、1人2回ずつ授業をしていただきました。

音　聖学院大学では、1クラスに2人の教員とサポート学生を付けるという、本当に手厚い態勢をとっていらっしゃいますね。

清水　はい。しかも、各学科の初年次教育以外に全学の初年次教育も行うという、いわば二階建てにしていますので、教員の負担増に対する抵抗はありました。しかし、各学部各学科の初年次教育はどうしてもある種の枠組みにとらわれる部分があるので、それを超えるために全学共通の初年次教育が必要であり、行う意味があると思っています。

安藏　明治大学では、30年くらい前から教養教育と専門教育が互いにくさび形に入り込む形をとっています。1・2年生のうちから、何を学ぶために入学したのかをはっきりさせ、それを実現させるためにはまず教養をしっかり磨きなさいといっています。

初年次、基礎、専門をシームレス化するための初年次教育

清水　聖学院大学でも、教養教育、リベラルアーツ教育の問題を初年次教育と結び付けて考え直してみようと思っています。初年次教育の概念はさまざまですし、大学によってレベルも全然違うことから、本学では入学前教育から始まって初年次教育、基礎教育、専門教育とシームレスにつなげるために初年次教育を立て直す意図で、先ほどご説明した二階建てを試みたわけです。

音　上智大学では、古くから初年次教育的な科目として本学のユニバーシティ・アイデンティティを担うコア科目を設けてきました。神学部に所属する教員が担当し、新入生が大学で社会の諸問題とどう向き合うかを考える、学部を越えた導入型の科目です。これに加え、今は学部ごとに初年次教育のプログラムを実施しようとしています。

また教養教育についても、上級学年用の教養科目を設けましたが、学生は、それがキャリアにどうつながっていくのかをまだ十分につかめていないように思われます。

横山　一種の副専攻の考え方ですね。慶應義塾大学でも、それを各学部で少しずつ取り入れ始めていて、専門以外に教養系の科目を学ぶことがキャリア形成に役立つということを積極的に広報しています。

安藏　明治大学の商学部ではダブルコアと呼んでいて、専門のゼミと教養のゼミを両方履修できます。政治経済学部の1・2年生の教養ゼミは面白いですよ。ある作家の作品を1年間、読み続けたり、小説の舞台になった土地を訪れたり。演劇論の場合は実際に芝居を見に行ったりして、興味を深めるというのはこういうことだとか、データを使って物事を考える時はどこからデータを取ってくるかということを体験的に学びます。学科の枠を超えて一緒に学ぶので、互いに刺激し合うという効果もあります。

音　お話をうかがって、初年次教育という概念自体が相当に幅が広いということを改めて感じました。

横山　初年次教育の考え方は、最初に米国で積極的に導入されました。日本でも、清

水先生がおっしゃったように、入学前教育でいかにモチベーションを高めるかに高い関心が寄せられていますし、離学する学生への対策、専門性の枠に閉じこもらずに外へ目を向けさせるための方策といったように、今は本当にその幅が広がっています。

慶應義塾大学の文学部でも、化学実験の授業を学部生に取らせ、結果を言語化させるなど、いろいろな試みが行われていますが、初年次教育は一筋縄ではいきません。

清水　アクティブラーニング的な要素は必須でしょうね。

欠かすことのできない学生の実態に対する教員の興味、関心、理解

横山　それはもう当然ですね。自律学習、主体的な課題発見と協同学習といったメソッドをどうやって開発するか議論しているのを聞いていると、昔ながらの座学だけの授業は、もうあり得ない世の中になったと感じます。

また、今の学生の脳のコミュニケーション回路は常に開いていて、刺激はたくさん入ってくるし、そこで複数の自分が生きている、すなわち自我がある意味で分解した状態で生きていることを、教員は理解することが非常に大切です。レポートを書くのに図書館へ行かずにインターネットで検索し、スマートフォンで書く。そういう学生を拒絶することはもうできませんから、初年次教育を行う上で教員が理解していなければならないことは、どういう人間が入学してきているのかという学生の実態です。

さらに、ダイバーシティの問題もあります。例えば発達障害の診断を受けた学生が一定数入学してきますから、教員自身が全ての学生に同じように接していると非常に危険な場合があります。そういった学生には、教員のほうから歩み寄ることも必要で、今は教員自身のスタンスが問われる大変な時代だと思います。

音　初年次教育の導入といいますか、初年次教育の前の導入部分について、お話を進めたいと思います。

教員は入学式で初めて新入生に接することになりますが、実は2月の合格発表の頃から、新入生同士はＬＩＮＥを使ってどんどん友達になっていって、入学時までにいろいろな話をしているという現象も起きているようです。安藏先生のところは付属高校なので、その点では非常にうまくいっているのではないでしょうか。

安藏　明治高校は、希望者全員が明治大学へ進学することができますが、実際に約9割の生徒が第一志望で明治大学の学部に入学しています。そのために、高校1年生の段階から学部の教育内容を理解させていく、つまり、大学の初年次教育のさらに前のこ

とを早い段階からやっています。

付属校であればこその入学前教育、初年次教育

安藏　他の高校と比べると、非常に特殊なケースだと思います。明治高校の生徒は、夏や春の長期の休みに明治大学の集中講座を受けることができます。会計学の簿記講座、物理や化学の実験講座、法学検定試験やTOEIC®の勉強やコンピュータプログラミングなどです。そういった授業を受けて、将来はどの学部へ行きたいかを自分で判断することのできる環境が用意されています。このシステムの効果は非常に高く、高校生のうちに簿記の2級を取得する生徒もいます。そうすると、明治大学の経理研究所に入ることができて、大学生と一緒に会計士の勉強ができる。その結果、明治高校出身者で大学1～3年生の間に公認会計士の試験に合格する学生が、毎年8人くらい出ます。しかも、高校時代に一緒に遊んでいた先輩が合格したと聞くと、じゃあ自分もできるかもしれないと思う。つまり、身近にロールモデルがいるわけです。

先日は、明治高校出身の弁護士が集まり、明治高校で法律を教えようという話になりました。その授業を受けた生徒が明治大学に入ったらすぐに予備試験を受け、在学中に司法試験をクリアしてもらう、そういったスペシャリストへの道も設定できます。

また、毎週水曜日に2時間、明治大学の教員に3年生の授業を担当してもらっています。近々、2年生から受けさせますが、それによって、大学で自分は何を学びたいかということを、高校の早い段階から考えることができるようになります。

高校生が大学の講座を履修し、単位を修得するプレカレッジプログラムというものも、毎年5・6名の生徒が受講しており、大学入学後には、卒業単位として認められます。

高校3年の3学期の時点では、進学する学部が決まっているので、学部から教員が来て高大連携ブリッジ講座という入学前指導の授業を行います。これは学部によって異なり、教員が来ないまでも宿題をたくさん出すところもあります。

明治高校では、英検2級とTOEIC®450点という基準をクリアしていないと大学への推薦が受けられないので、英語には力を入れています。先日は、高校3年生で英検1級とTOEIC®で900点台を取った生徒が出ました。周囲にそういう生徒がいる環境があると、みんながんばるようになります。

もちろん、生徒の選択肢は明治大学以外の大学へも広げていますが、明治大学の教員が高校に来て授業をしているので、他の大学へ進んだ場合でも、大学で何をどう学ぶか、あるいはキャリアプランをいかに確立するかといったことはあらかじめ身に付けていると思います。明治高校では、3年生まで文系・理系を分けていません。自分は英語ができないから理系を選ぶとか、数学がだめだから文系へ行くというのは負の選択でしかないと、私はずっと言い続けてきました。いまはもう、文系でも数学ができなかったらやっていけませんし、理系の文献や論文はほとんどが英語だという話をして、そのことが生徒たちにだんだん浸透してきました。

いろいろな勉強をして、脳の基礎体力を

鍛えて社会へ出て行きなさい。君たちを大学へ入れるのが目的ではなく、社会へ出てから「第一級の人物」になるための力を付けるのがこの学校の目的だと言っています。そういう意味では、高大連携と入学前教育がきちんと一致しています。

一方で、高校生のうちから一生の進路を決め込んでしまうのもどうかという気もしていて、大学でたまたま面白い先生に巡り会えたので、その専攻を選び、それが一生の仕事になるという生き方も良いものだと生徒たちには話をしています。

入試区分が生む学生気質の違い

難波　関西学院にも併設高校（高等部）がありますが、そこでの入学前教育は各学部それぞれに実施しています。推薦やAO入試で早めに入学が決まった生徒に対しては、課題を出すことを高校の先生も望まれます。社会学部では、社会学の新書を何冊か提示して、その中から選んでレポートを出させるようにしています。

最近、各種の推薦入試で入ってきた学生と、一般入試で入学してきた学生の間に、なにがしかのギャップのようなものが生まれがちなことが気になっています。一般入試、とくにセンター利用で入ってきた学生は必ずしも第一志望で本学に入学したとは限らないこともあってか、入学後しばらくはどこかなじめずにいます。それに比べて併設校などから入学した学生は、関西学院大学に来るのが当たり前だと思っていますし、高校時代から人間関係ができているので、固まってにぎやかであるのに対して、一般入試組はそれに違和感を覚えて、一緒にいるのはいやだという声を、特に1年生の時に多く聞いたりします。

高校時代からつながりができること自体はいいことですし、皆をリードしていこうという学生も中にはいるのですが、高校の時からLINEでつながっている仲間同士で、どこか閉鎖的な空間を作っているようにも見えます。自分たちはこの大学に慣れているということを誇示する学生と、まだ慣れなくて困っている一般入試組の学生の温度差が激しい様子がうかがえます。

そこで、1年生のうちに何とか融和させたいと考え、基礎演習のクラスでは併設校などから来た学生は、同じ学校から1クラスに1人ずつしか入れない、スポーツに優れた者を対象とした試験（スポーツ試験）で入学した学生や留学生なども固めないといった取り組みを行っています。また、スポーツ推薦で入学した学生については、学生部主導で入学前の通信教育を行うなど、学業面におけるサポートも行ってきました。

安藏　私学ですので、建学の理念を理解し、大学のコア的存在になってくれる学生を入学させることは大事だと思う一方で、そのことによって排他的になってしまわないようにすることが重要です。

私は付属高校の校長として各学部長とお話をする時に、付属校では文化祭や体育祭や旅行行事といったことを全て生徒に企画させており、リーダーシップの育成に非常に力を入れているので、各クラスのリーダーとして使ってくれればクラスがまとまりますよという話をしており、大学もずいぶん協力してくれます。これは付属校がある大学の強みでもあり、大学に入ってから、彼らが他の高校から来た学生の刺激になるような人材となる環境をつくることが必要です。

清水　私共の法人にも高校がありますが、入学前準備教育では、むしろ公立高校や地元の私立高校から来る学生に対して、入学するまでにどうやってモチベーションを維持し、高めさせるかが課題となっています。そして、この課題への取り組みに際しては、出身高校による差が非常に大きいことが指摘されます。

一般の高校との高大連携は、理念としてはよく理解できても、その実態はなかなか難しいものがあり、大学から高校に対しては、読み書きそろばんの部分をもっとしっかりしてほしいという思いを持っています。今後の教育改革は、大学が一巡した後は高校に向かっていくのではないかと感じており、その時にどういう連携を形づくっていくか、われわれ大学にとっても高校にとっても大きな課題だという気がします。

音　上智大学には付属高校がありませんが、推薦入試で入った学生に聞くと、高校によって違いはあるものの、推薦で合格していても大学入試センター試験は受けるように言われたので勉強を続けたという話もあります。一部の教育提携高校に対しては、入学までに行う課題を毎月出していますが、それが必須というわけではありませんので、大規模校で付属の中学高校があるところとそうではないところではずいぶん事情が違うということを、いまのお話をうかがって感じました。

難波　同じ併設校でも大学に隣接しているかどうかで、教員が容易に行き来できるかどうか、高校生が大学の図書館をすぐ利用できるかどうかなどが違ってきますし、距離があるとうまくいかないことが増えるように感じています。

初年次教育の学生、そして教員にとっての効果

音　続いて、初年次教育の効果について、お聞かせいただけますでしょうか。

難波　学部として初年次教育に取り組む必要があるという認識の高まりは、教員の側にはいい影響を与えているように思います。自分は関係ないという教員はほとんどいなくなりました。初年次からみんなでコミットしようという感じになってきており、学部全体で、レポートや卒業論文のスタイルブックのようなものを作ってみたり、社会学のキーワード集をネット上に構築して学生が利用できるようにし、キーワードに関わりのある授業や教員を参照できる仕組みをつくるといったように、教員側の意識は大きく変化してきています。

特に私の所属する社会学部では、社会学ならではの特殊性を利用して、語学や宣教師・宗教主事の先生も専門ゼミを担当し、それも広い意味では社会学の範疇だと位置付けています。その意味では、初年次教育の改革の意義は、昔のように教養と専門に分かれて取り組むのではなく、1年生から4年生まで、自分たち教員が学生の面倒を見なくてはいけないという意識づくりにこそあったのではないかと思います。

それによって学生がどのように変わったかという効果については、まだ見えてきていない面はありますが、以前は、入学して1セメスターだけ基礎演習を行い、3・4年生が専門ゼミだったものを、基礎演習を通年にしたり、2年生から専任教員がゼミを担当したりといったように、4年間をできるだけシームレスに、いつも誰かが個々

の学生を見ているようにカリキュラムを変えられたのは教員側の意識改革あってのことですし、それは初年次教育を再考する議論の中で生まれたものだと思います。

清水　初年次教育関係の本をいろいろ読んでも、どうやって効果を測るかというのは難しい問題のようです。本学ではアンケートという古風な方法をとりましたが、学生の9割が「とても良かった」と肯定的な回答でした。ただし、自分に対して発見があったかという問いに対しては「あった」とする回答が80％を下回っていますので、アンケートをとった教員は、まだ自己の気付きを促すようなプログラムになっていないのではないかという反省をしています。そのあたりが、今後の課題だと思います。

教員は、初年次教育を全学にブレークダウンすることに対して、当初は大きな拒否感がありました。現在は、初年次教育の充実について好意的に話し、理解を示してくれるようになったので、全学的に実施したことの意味はあると思います。

難波　初年次教育はもちろんですが、大学教育の効果は20年後、30年後に現れる可能性があります。それをどうやって測るかは、本当に難しいですね。

教育とは、システムではなく人間と人間のつきあい

安藏　明治大学では、1・2年生の教養ゼミは3・4年生の専門ゼミとは異なりますから、教員もその違いを楽しんでいます。入学したばかりの学生の中には大人と話すのがとても苦手な者もいますが、ゼミを始めて2週間程経つと、だんだん発言するようになります。また、ゼミごとに学部の論文集に投稿ができますので、自分たちが書いて発表したものが活字になる喜びがあります。そして、学生にもっと幅を広げてもらうため、1・2年生の時のゼミの教員が、3・4年生のゼミは他の教員のところへ行くよう学生に勧めたり、教員もいろいろな出会いを楽しんでいます。これが初年次教育の一つの効果ではないかと思います。

教育とはシステムではなく、人間と人間のつきあいです。だから、いろいろな出会いがある。それが大学教育の面白いところではないでしょうか。

横山　効果については、1年生の終わりに効果を測る場合もあるし、難波先生がおっしゃったように社会人になった時に、最初の1年がどのように作用しているかを見る場合もあると思いますし、それ以前に、専門に進んだあとにどれくらい意味があったかといったように、いくつかの段階を踏んで効果を見る必要があります。しかし、教育の効果はすぐには現れないものです。私自身も、社会に出たあとに、大学で学んだことのうちの何が役に立ったのかを考えると、これは難しく、自分が効果を自覚する前から人格は形成されていく面がありますので、初年次教育の意義を問うことは非常に難しいと思います。

ただ、これは私個人の意見ですが、大学を自分の居場所と考えることができるかどうかが一番大切だと思います。今の学生はちゃんと学校へ来ますが、そこに自分の居場所を見つけることができるかどうか。大学のあの場所が好きだったとか、サークルが楽しかったとか、あの先生とこんな話をしたとか、そういうエピソードと共に、大学のどこかの空間を自分の居場所と考える

ことが初年次のうちにできれば、それは一生ものだと思います。

大学は学生にとっての〝居場所〟となっているか？

横山　初年次教育による効果としてどのようなものがあるかということも大切ではありますが、その学生の中にどれだけの変化を生み出すことができるのかということと、大学という空間にもっといたい、大学をもっと活用してやろうという気にさせることが大切なのではないでしょうか。

大学が学生に提供しているものは、実は無尽蔵にあると思います。私は、自分が学生の時にはそれに気が付かなかったし、ほとんどの学生はその点、今も同じだと思います。しかし、初年次のうちに、大学がどれほどのものを学生に提供しようとしているかを理解させることが大切で、その効果はやがて絶対に現れると思います。長い目で見るということと、何をもって初年次教育と考えるかということがポイントです。

音　最後になりますが、高校側、大学側それぞれに求められる生徒・学生支援の在り方については、どうお考えでしょうか。

清水　難しい問題ですが、やはり高校側に求められるのは基本的な学習能力や学習に対する姿勢を作ることです。それを大学における専門的な知につなぐために、初年次教育では受動的な生徒をどうやって能動的・主体的な学生に変えていくか。その間のこれまでは大きすぎたギャップを埋めていくことが初年次教育だと思います。

本学の初年次教育には、サークル活動の総会を見せるという場面があります。それは、勉強以外の部分である統率力や人間力といったものも評価するということです。また、震災のボランティアを体験することによって何かを発見し、社会的基礎力を付けて人間的に伸びる学生もいます。受動から能動へと変わるよう、連続性をもって教えていく。そういうことも広い意味での学生支援の在り方として捉え、初年次教育を考えてきました。

ただ、学生が集団的に伸びていく部分と個々の学生の伸び方とはギャップがあるので、集団的初年次教育が個を伸ばすことにどれくらいつながっているのかという疑問はあります。初年次教育が強調される場面では、集団的な達成というところに力点が置かれているように感じられるので、そのあたりをどのように考えていくのかが今後の課題ではないでしょうか。

音　清水先生のご指摘は、私も同感です。本学では、長らく入学直後にオリエンテーション・キャンプを実施してきましたが、その際に新入生の面倒を見るヘルパーという先輩たちが、授業開始後も個々の学生を

きめ細かく指導しています。ただ、そのヘルパーと教員がうまく連動しているかというのが、いつも課題になるところです。

教員と職員の密な連携が初年次教育の絶対条件

横山　今、清水先生がおっしゃったように、ピアラーニングの部分がこれからは非常に大切になってくると思われます。米国では、ピアラーニングや、TAとスチューデントアシスタント（SA）に特化した学会が既に活動しているほどです。

　これは初年次教育だけの問題ではありませんが、学生がどこでつまずくかは一人一人異なりますので、問題をいかに見つけ出すか。あるいは、ラーニングコモンズをキャンパスに設けたり、そこに学生アドバイザーが付いたりといったいろいろなことが行われていますので、集団的な部分と個々の学生への対応をどうやって結びつけるか。学内の部署ごとに分かれている機能をつなげることによって、個々の学生をいかに助け、伸ばすかが、これからの大学のシステム論としても重要になってくるのではないかと思っています。

清水　初年次教育の展開では、職員がかなりの負担を背負っている状況の打開が課題となっています。職員はシステムの中でも重要な要素です。

横山　学生が困った時に、まず行くのは教員のところではなくて職員のところです。教員は職員とどれだけ密になれるか、その関係性が良いことが絶対の条件ですね。

安藏　3・4年生のゼミで教えていると、卒業した高校によってだいぶ違いがあることに驚きます。例えば、私立文系の入試は3教科なので、一部の有名進学校ではずっと3教科を教えていて、数学をほとんど勉強していません。私のゼミでは大量のデータを扱いますので、基本的な指数・対数や行列、ベクトルなどを理解できなくては困るので、高校レベルの数学から教えることになります。つまり、初年次教育以前に入試の問題があるのではないでしょうか。

　明治高校では全教科を教えていますので、大学に入ってからの学習が非常にスムーズです。IR（Institutional Research）でデータを分析すると、3教科入試よりもセンター入試で入った学生のほうが入学後の成績がいいし、勉学に対するモチベーションも高い。やはり、いろいろなことをきちんと学んできた学生のほうが入学後の勉学意欲が高いですね。そういう入試制度の問題が、初年次教育にも専門教育にも影響してくるということが根底にあるような気がしますし、日本の教育の大きな問題点がそのあたりにあるように思います。

　また、付属校から大学へ進んだ学生に聞くと、高校で学んだ内容が全部、大学の専門科目に入っているので面白いと言うのです。高校の学びが大学の専門教育までつながっている、そういう教育を高校ではしてほしいし、大学ではそういう学生に喜びを与えるような授業なりカリキュラムなりを作っていく必要があると感じています。

横山　学生に期待するのは、グループの一員として動くだけではなく、一人でもきちんと課題に向き合うことができる人間になってほしいということです。また、現代はいろいろなコミュニケーションツールがありすぎるので、それを適切に使い分けることと、その怖さを理解していることが必

須です。学生の中には、教職員とのコミュニケーションがまともにできない学生もいて、コミュニケーションのマナーからもう一度、教え込まなければならないこともあります。

自分のコアを持ち 他者との違いの理解を促す学生支援

横山　学生支援の一つとして、私自身が初年次教育で考えたいのは、「多様性」です。意見を求められた時に答えられるためには、まず自分のコアをしっかり持っていなければなりません。その上で、他人は自分とは違うということを理解してほしいですし、それは同時に、他者や異文化に対する理解や支援にもつながると思います。

リメディアルのことも初年次教育では大きな問題で、自分に足りないものを大学に入ったら積極的に学び直す仕組みは、やはり学生支援の一つになります。

学生に対しては、繰り返しになってしまいますが、大学で自分の居場所を見つけてほしいと思います。学ぶ場所であったりサークルだったりというように、自分がやりたいことをかなえてくれる居場所を複数持っていてほしい。それがあれば、社会人になってもいつでも戻っていける場所が大学になっていくと思います。

難波　安藏先生のお話をうかがっていて思い出したのですが、本学では今年、高校の時の課題研究も評価対象にする入試制度を作りました。願書や面接の場でその課題研究について述べてもらったのですが、その内容は非常に興味深いものでした。

これは従来の入試では測れない学力かもしれませんが、自分で課題を発見し、考え、結果をまとめてプレゼンテーションができる、こういった大学での学び方を既に身に付けた学生が基礎演習のクラスに一人いてくれたら、周囲にとてもいい影響を与えてくれるのではないかと思いました。

その意味では、今の高大接続システム改革の方向性をポジティブに捉えてもいいのかもしれませんね。

安藏　現在の中学1年生が高校2年生になる頃に大学入試が大きく変革しますので、従来の知識や技術を問う入試から変わっていくでしょう。これまでのように3教科だけの入試で人間の能力を測るということは非常にリスクがあるし、入ってからのフォローも大変です。だから、なるべく幅広く学んだほうがいい。全てができなくてもいいからまんべんなくできるほうが、何かに関心を持った時に、学んだことを全部集中できる力があるように思います。

横山　いろいろな魅力をもった学生がいますので、ダイバーシティを常に意識しつつ、一点突破型の学生も大切にしたいですよね。

音　本日は、初年次教育の現状とそのありようについて多角的に議論をしていただいたと思います。初年次教育との向き合い方が、それぞれの大学が置かれた環境条件によってずいぶんと異なることがわかりました。また、その展開では、国立大学では実施しにくい高大連携を基盤にした入学前の指導を行うことも可能であることが改めて確認できました。

初年次教育は、私立大学にとって、その大学の特徴を出すことを含め、多くの可能性を秘めていることがわかったように思います。

本日は、ありがとうございました。